

なぜ、いうことをきかないの！

—依存と反抗の相互関係—

佐々木正美（精神科医）

「なぜ、いうことをきかないの(反抗)」というテーマについて一緒に考えていくことにいたします。職業柄、「うちの子は、ちっとも親のいうことをきかなくて困っています」という悩みや相談をたくさん受けます。

けれども、子どもは何も故意に反発しているわけではありません。よく考えてみると、親の方こそ子どもに一方的にあれこれ押しつけ、子ども自身のいうこと(欲求)をきいてやっていないことの方が多いのです。子どもは、親への十分な依存なしには自律(自立)できないのです。ですから、子どものいうことをたくさんきいてあげなければ、子どもは親のいうことをききません。子どもの欲求の三つや四つをきいてやって、親のいうことを一つきいてくれる、というくらいの気持ちと、余裕が子育てには必要なのです。

今月は、親への依存経験のあり方を検討しながら、なぜ子どもは親に口答えや反発や反抗するのか、私自身も子どもを持つ一人の親として一緒に勉強していくことにいたします。

Q. 親は頭のなかでは冷静になっていても、つい「どうしていうことが分からないの！」と怒鳴ってしまいますが…。

「自分の子どもを愛していない親はめったにいませんし、心から子どもを愛していると自覚しています。そして、将来は社会的に立派な人間になって欲しいと誰もが思っています。ですから、将来のことを考えて、例えばピアノを習わせたり、ソロバン塾に通わせたりもするわけです。その結果、子どものときに身につけた知識や技術が、確かに大人になったとき大いに役立ち感謝することがあるかもしれません。しかし、そうしたことの大半は親のお仕着せで、子どもが心から満足していることではありません。満たされないと、子どもは親のいうことをききませんし、むしろ抵抗を示します」

Q. 親は権威的に上から屈伏させる形で、親のいうことを子どもに強要していることが多いということですか。

子どもは自己を確立していくために依存と反抗を繰り返す

「スイミングやピアノや塾が悪いとは思いません。しかし親子の基本的な構図から見れば、やはり子どもの意思をなかば無視して、親の立場から“子どもによかれ”という大義名分でやっているわけです。ところが、子どもの立場からみますと、親にやって欲しいことはたくさんあります。赤ちゃんのときなら夜中にオッパイが欲しい、抱っこやおんぶをしてもらいたい、あやして欲しい。少し大きくなれば、本を読んでもらいたい、夕食はハンバーグを作って欲しい、Aちゃんの家へ連れて行って欲しい。これを一つ残らずすべて叶えてやるのは容易なことではありませんし、また不可能なことです。親はその都度、親の価値観に照らし合わせて、どの要求を満たしてやるか取捨選択しているわけですが、その際とくに重要なことは、親自身にしかできないこと、つまり他人では代わってやれないことをきいてあげることが大切です。例えば金銭で買えるものは親でなくてもいい。おじいちゃんを買ってくれる場合もあるし、大きくなれば自分でアルバイトして買うこともできます。ですから、乳児期であればオッパイが欲しいときにすぐに飲ませてくれた、幼稚園のとき心のこもったお弁当を作ってもらった、というような心の満ち足りた依存経験を十分に親からもらった子どもは、比較的親のいうことをよくききますし、また親離れや自立もスムーズにいくようです」

Q. 日常生活のなかでの小さな積み重ねが大切なのですね…。

「誕生日に高価なものをポンと買い与えても、喜びは1、2週間もすれば薄らいでしまいます。やはり、子育ての基本は日常生活のなかで、子どもの要求をできる限り満たしてあげることです。そうしたベースがあって、プラスアルファとして子どもの将来を親心からあれこれ考慮するのが本筋だと思います。



それからもう一つ、親は次のような認識を持ちながら子育てをする方がよいと思います。つまり、子どもは本質的には親のいうことはあまりきかない。

そのかわり親のやることは真似る。それも良いことは真似ず、悪いことを真似て育っていく。大人は口では結構なことは言いますが、実際は悪いこともかなりやっている。そして、子どもに指摘されるとうまいことを言ってごまかす。けれども、子どもはちゃんと見ています。『親の後姿を見て子は育つ』とはなかなかの至言です。とにかく口うるさく注意しなくても、親の言動を見て子どもは育つのですから、常日頃、しっかりした価値観を持って生活していれば、子どもは成長していく、という程度の余裕があればよいと思います」

Q. 口答えをする程度ならまだ可愛い気がありますが、反抗してくるとさすがに手を焼き、親も自信を喪失してしまいます。

「子どもは自分を確立していくために、絶えず依存と反抗を繰り返します。子育ての厄介さは、親に依存してきながら、それでいて反抗してくることです。ですから親は、子どもにあまりよりかかれるとひどく重く感じ、反対に反抗されるとイラ立ったりします。親業とは大変な仕事だと思います。けれども、子どもに依存されることは、本当は喜びなのです。反抗でさえ、喜びにならなくてはいけないと思います。私は自分の職業のせいもありましょうが、子どもの反抗を非常に楽しみにしております。上の子はこの年齢には反抗したのに、下の子はまだ反抗期が来ないようだ、といった具合で、むしろ心配になったほどです。そして実際に反抗期が来ると『やってる、やってる。なかなか手ごわいぞ』と子どもと少し距離を置きながら、内心、反抗期の次にやってくる成長を楽しみにしております」

反抗がなければ社会的成熟のないモラトリアム人間になる

Q. 反抗も子どもの成長過程のなかでの大事な節目なのですね。

「そのとおりです。依存や反抗が足りなければ足りないほど、子どもは成熟いたしません。養護施設や保育園の先生方にはしばしば申しあげますが、子どもたちから思いきり依存される保育者になってください、そして思いきり反抗を受けとめられる先生になって欲しい、と。ちょうどピッチャーの素晴らしいスピードボールをバンとミットに受けたキャッチャーの喜びのようなものです。そんな、ゆとりがあれば大丈夫です」

Q. 反抗に対する、そのようなゆとりはどうすれば生まれるのでしょうか。

「夫婦が良い意味で依存し合っていて、仲の良いのが一番なのではないでしょうか。子どもがよりかかってきても激しく抵抗してもその分を夫なり妻なりによりかかれますから、負担が半減します。ところが夫に依存できない、さらには友人や知人や隣人を持たないとすると、母親は一身に子どもの依存と反抗を身に受けて、孤独のなかで精神衛生は非常に劣悪なものとなります。夫婦が依存し合って、頼り頼られ支え合っていれば子どもをゆっくり見守ることができると思います。ですから、親の仲が良いと、子どもは安心して依存してきます。安心して反抗もできます。依存の量と反抗の量が多いほど、子どもは自分と世界を信じる力が強く、急速に自立していきます。反抗がなければ、むしろ怖いと思った方がいいでしょうね」

親の価値観をベースに子どもの行動を見守ろう

Q. 親としてショックなのは、「ママなんか大嫌い」「パパの馬鹿」ぐらいは平気でいられますが、「ママなんか死んじゃえ」とやられるとグサツときます。

「子どもが、そういうことを言っている時期にいくら注意してもあまり利き目はないものです。というのは、そのとき実は子どものプライドはひどく傷ついているからです。子どもの心を傷つけるような注意の仕方をする、子どもはときにそんな言葉を吐くものです。すると親はついエスカレートしてさらに手厳しく叱り、子どもはますます萎縮する、といった悪循環を繰り返すこととなります。子どもはより劣等感が強くなり、少なくとも素直な子どもにはなりませんね」

Q. 上手な叱り方が親に求められているということですね。

「誰も完璧な理論通りの育児なんてできません。けれども、子どもの自尊心を傷つけないように叱ったり注意したりすることは、子育ての知恵として知っておかれて



よいと思います。しつけというのは、子どもは依存と反抗を繰り返しながら成長するものだとして承知しつつ、親の価値観でろ過をして社会的に許容される行動を、自尊心を傷つけないように教えていくことです。ですから親はしっかりした価値観を持っていなければなりませんし、さらに価値観は一人ひとりの親によって違ってきます。この親の価値観に基づいた行為や行動を導いていくプロセスをしつけというわけですね」

Q. 反抗は自己を確立していくために避けることのできないものだから、親はあまり神経質にならなくてもよいということですか。

反抗は親への基本的な信頼があるから起こる

「そのとおりです。反抗は発達の実習場面です。反抗は親に向かって攻撃的に言ってくるものだけではありません。表面的には激しく反抗してなくても親の意見や注意を無視するのも反抗です。また、夜遅く帰ってきたりして、親が嫌ったり反対するようなことをわざと行動で表すのも反抗です。このようなとき、親が口出しをすれば、口答えとなって反発し、親が黙っていればそれで済んでしまう。しかし、これも反抗です。親はどちらにしても心配です。そして、こうした子どもとのいわば確執のなかで、度が過ぎたら叱責し注意する部分と、この程度なら黙認し許容しておこうとする部分があり、これが親の価値観です。けれども私の個人的な考えでは、門限を破るとか小遣いを使い過ぎたとかいう程度は健全な反抗で、大目に見てよいと思います。むしろ親が口やかましいので時間通りに帰宅する方が、かえって心配です。しつけはTPOを心がけることだといいますが、そのTPOをはずすのが、また子どもなのです。親は心配ですが、基本的には見守ってやる姿勢が必要だと思います。子どもの反抗は、基本的には親に対する信頼のうえに成り立っているものなのです。ただし人を殴ったり傷つけたりするというのは別問題です。また暴走や集団暴力や“いじめ”などはきわめて不健康な集団的反抗ですから、これも話は別です」

幼児期はゆっくり見守りながら事故などに注意を

Q. 個人的な親への反抗は歓迎すべきものなのですね。

「親を信じているから反抗をしているのだと認識していればよいのです。いわゆる反抗期は3歳前後、就学前後、思春期にあります。この時期は同時に子どもが急速に成長するときです。成長するときは絶えず反抗をしていると思って間違いありません。子どもの成熟発達にはラセン階段を登るようにして成長していきます。3歳、6～7歳、12～13歳とそんなに間隔をあけずに反抗期がくるのがいいようです。そして、子どもが健全に成長するためには、反抗期はあまり抑え込まない方がよいと思います。ただし、3歳児や就学前後の子どもは、未熟な判断で能力以上のことを精一杯やろうとしますから、順調に育てようとすると事故と背中合わせの関係になります。こうした点は危険から守るような手だては必要ですね」

Q. 注意したり手助けするところと、見守るところを見定めることが大切ですね。

「大ケガや交通事故など取り返しのつかなくなるようなことは厳しくチェックしておけばよいのです。ところが親は、つい必要以上に口出しして、子どもが自分でやろうとしていることを抑えてしまいがちです。こういうことは、実は親が孤独なときになりやすいのです。孤独なときは不安定なのです。口うるさいのは不安の裏返しです。孤独でないためには先述しましたように妻と夫が十分な依存関係にあればいいのです。とにかく反抗は自立のサインですから、十分に受けとめて欲しいものです」

Q. 自立というのは、一人で何でもできるということですか。

親も子どもも友だちや仲間を頼り頼られることが大切

「友だちや多くの仲間と、勉強やサッカーや遊びを教えたり、教えられたり、つまり友だちと相互依存関係がつかれるのが自立でして、一人で上手にピアノが弾けたとかクロールで50メートル泳げたとかの個人的能力や技術は自立ではありません。友だちを信頼し、また友だちから信頼を寄せられる能力とっていいかもしれません。反抗は、そういうものを身につけるためのステップです」

Q. そのためには、親はきちんとした社会生活を営むことが必要で、子どもは親のそんな姿を見て育っていくのですね。

「社会生活といっても、人に迷惑をかけないかわりに、迷惑もかけられたくないというのは不健全です。迷惑という言葉が適切でないかもしれませんが、誰かを頼りにする、依存すると考えればいいと思います。頼り、頼られるバランスが大切です。子どもも友だちと頼り頼られ、友だちのなかに羨やましきや、素直に相手の良さを認めたときに大きな成長があるのです。反抗も成長のための通り道ですから、ゆっくり見守ってあげるのがいいと思います」

佐々木 正美 先生

子育て楽会顧問 川崎医療福祉大学教授 横浜市総合リハビリテーションセンター参与 ノースカロライナ大学臨床教授 精神科医

主著：

「エリクソンとの散歩」子育て協会

「子育ての本」子育て協会

「子どもへのまなざし」福音館書店

「育てたように子は育つ」小学館

「自閉症療育ハンドブック」学習研究社

他に多数の著作あり

Copyright 1989、2006 Masami Sasaki

許可無く無断複製と配布を禁止します

※B5用紙に設定されています

「MIND 子どもの心を育てるために」

<http://mindsun.net>
